

美術の窓(68)

古代古典美術の成立 — 飛鳥・白鳳・天平[6]
仏教における金堂形式の成立(2)

大和文華館館長 吉川逸治

人体的比例の建築 これら白鳳・天平の寺院建築は、こうして構造の論理が明快に提示され、円柱と斗拱・桁梁・屋蓋の結合が、簡素で武骨すぎず、優美・繁雑でもなく、調和よい姿に解決されている。ここでいう明快とか調和という基準は、われわれ人間と建築との関係から生まれているので、人体比例がこれら寺院建築でも、たとえギリシア・ローマの古典様式ほど単純明瞭でなくても、適用されているという事実を看過してはいけない。尺はすでに人体の尺度であるが、ここでも円柱が人体の比例を写し、人体の触感すらも伝える役割をもって、建築を人間化するのみならず、人体を基準として建築を観察し、鑑賞するので、明確に構成も調和も読みとれる。だから単純な数値と幾何学形の組み合

わせで、構成も調和も証拠を示して説明できる。これは古代寺院建築から、近世の住宅・茶室まで一貫した日本建築における尺度の人間主義の伝統である。

しかし、近世の人間主義は現実の人間なり庶民の理想像だが、古代の人間主義は、神々とならぶような偉大な英雄、エリートの間人主義であって、人体比例は同じでも、庶民尺度ではなく、英雄や巨人の尺度であり、神々の尺度であって、ここにまた古典様式たる性格が存する。

円柱列 古代ギリシア・ローマの古典様式では、単純明快に円柱が人体の比例に準じて作られ、円柱を女人柱に置きかえることもできるほど、円柱は人体に近い。壁面に古典円柱をならべて構造物を装飾し、人間化して、建築物に仕上

げる。円柱列はさらに戸外空間を整え、リズムを与え、人間的空間にするため、さかんに使用される。円柱列なしに古代ギリシア・ローマ人の生活空間を考えることは不可能である。神殿や邸宅の入口には列柱廊が設けられ、広場は円柱列でかこまれ、アーケードを設ける。

この古典様式の円柱列とアーケードは、ガンダーラのギリシア式仏教伽藍に採用され、ストゥーバを飾り、それをめぐってアトリウム風の列柱回廊が設けられる。神殿や八角堂の前面入口にはローマのパンテオン神殿のように列柱廊が設けられていたろう。

そこで、法隆寺の列柱回廊は、ガンダーラの伽藍を通じて、遠いギリシア・ローマの列柱回廊に縁が結ばれ、したがって夢殿の八角

円堂も、唐招提寺金堂の前方一間の吹き放ちの列柱廊の形式と同じく、ローマのパンテオン神殿と遠縁関係になる。ただ、古典様式の遠い源泉から伝えられてきた形態観念が、単なる古典建築の模倣・変形ではなく、いかに新しい材料で実現されているか、またいかに新しく復興しているかを見ると、まことに奈良は古典の地であると感嘆せざるをえない。

(筆者著書「日本の美術1 日本美術入門」監修/亀井勝一郎・高橋誠一郎・田中一松、1966、再版1980年、平凡社、より)

本書の英訳本『Major Themes in Japanese Art』translated by Armins Nikovskis, 1976, Weatherhill, New York)

法隆寺 西廻廊



季刊 美のたより No.124

平成10年 8月27日

発行 大和文華館